

パートナーに対する暴力の メカニズム

Dark Triadと生活史戦略による 個人差に対するアプローチ

法政大学大学院人文科学研究科
(現：東京大学大学院教育学研究科)

喜入 暁

1.1. パートナー間暴力 (IPV; p. 1)

intimate partner violence
(IPV)として包括的に
(Ohnishi et al., 2011)

婚姻関係あり



同質 (Dillon et al., 2013)

婚姻関係のない
交際関係

中学生でも発生
(Giordano et al., 2010)

IPVが引き起こすもの

不和 (Copp et al.,
2015)

ストーキング (Douglas
& Dutton, 2001; Melton,
2007)

殺人 (Nicolaidis et al.,
2003)

1.1. パートナー間暴力 (IPV; Table 1.3, 1.8)

社会の対応

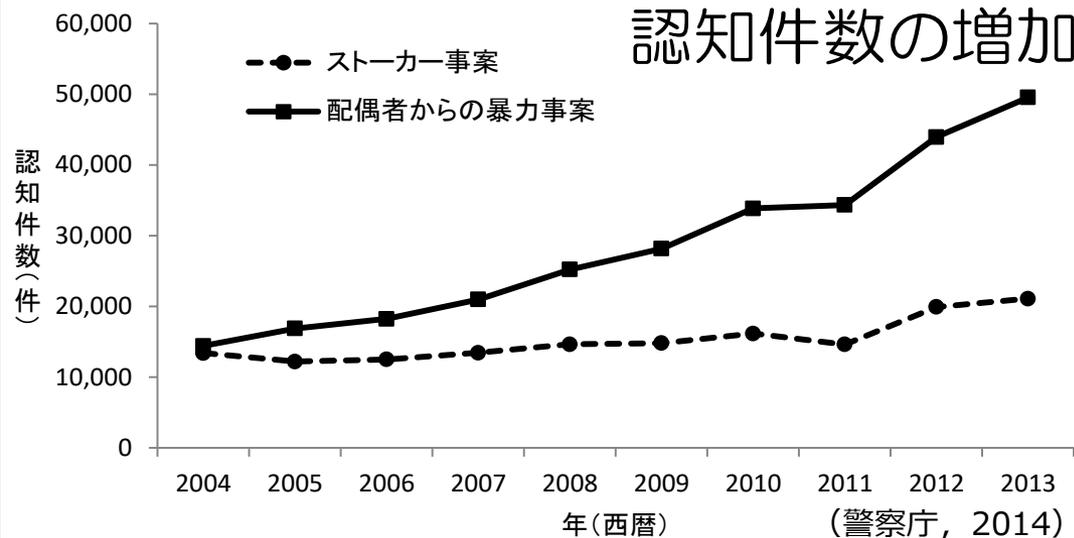
- ❖ DV防止法
※基本的には婚姻関係が前提
- ❖ 避難シェルターの拡充

研究

- ❖ 暴力のサイクルモデル (Walker, 1979)
 - ◆ 緊張形成期
 - ◆ 爆発期
 - ◆ 開放期 (ハネムーン期)

- ❖ 加害者類型 (Holtzworth-Munroe & Stuart, 1994)

認知件数の増加



IPVのリスクファクター (Table 1.8)

加害リスクファクターカテゴリ	例
メンタルヘルス	うつ, 不安
攻撃的思考/認知	交際関係での暴力受容
若い時の暴力	ケンカ, 全般的な反社会行動
薬物使用	アルコール, マリファナ
危険を伴う性行動	8年生で性経験あり, セックスパートナーが多い
恋愛/友人関係の質が悪い	敵意的なカップル関係, 反社会的友人との関与
家族の質が悪い	両親の対立, 子どもの頃の身体的虐待
個人の属性	子供の性別, 人種
暴力的なメディア	-

□ 一貫性は?

Vagi et al. (2013)

1.1. パートナー間暴力 (IPV; p. 2)

□ 発想の転換

- ヒトの成り立ち（進化的適応）から捉えてみよう！

- パートナーへの暴力は、どんな進化的適応機能を持つ？
 - ◆ ⇒ パートナー関係維持行動の一つ (Buss & Duntley, 2011)

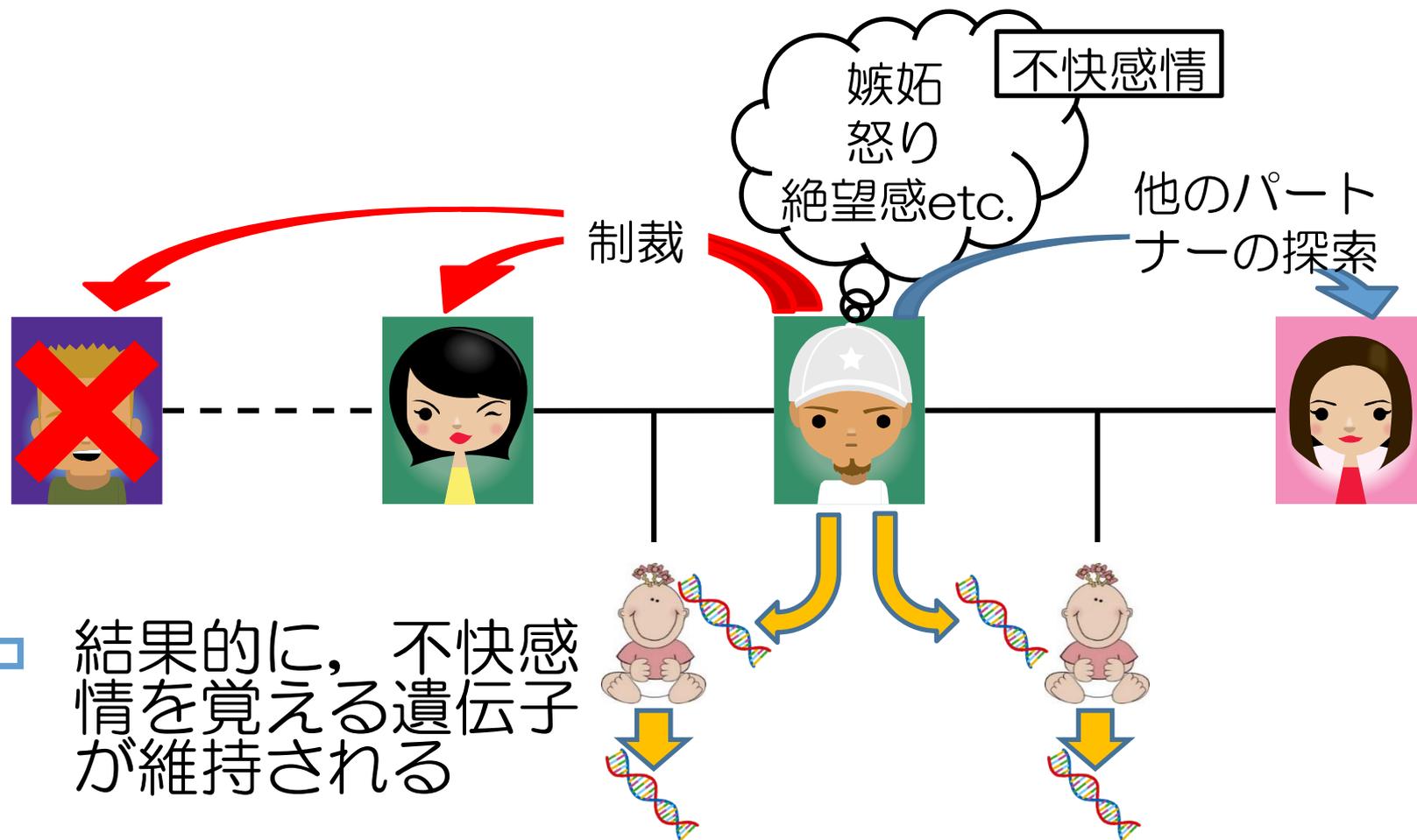
1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 2)

□ 進化へのアプローチとは？

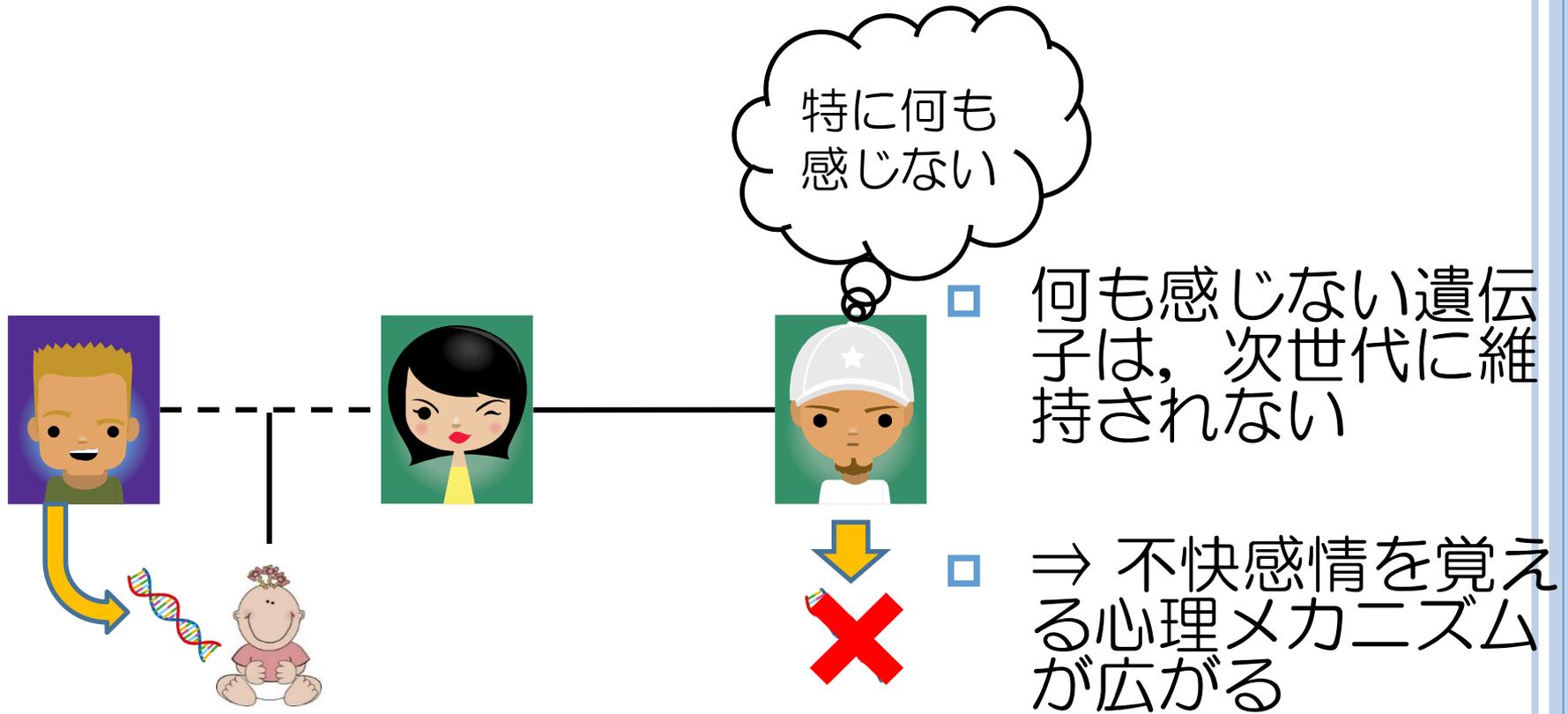
- 様々な心理・行動パターンは，進化的適応の結果として形成された戦略 (strategy) である，という立場。

- ◆ 「戦略」とは，目的を持った意図的な行動ではなく，単純な行動パターンを意味する。
- ◆ 行動生態学では，戦略とは「ある特定の効果を達成するために取り得る行動のセット」を指す (長谷川・長谷川, 2000, p. 57)

進化は結果



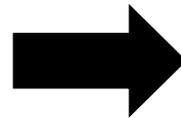
進化は結果



1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 2)

□ これまでのアプローチと相補的な関係

❖ 進化的に獲得された
メカニズム



- ❖ 心理メカニズム
- ❖ 行動パターン
- ❖ 社会的相互作用
- ❖ 発達過程

これまでのアプローチ

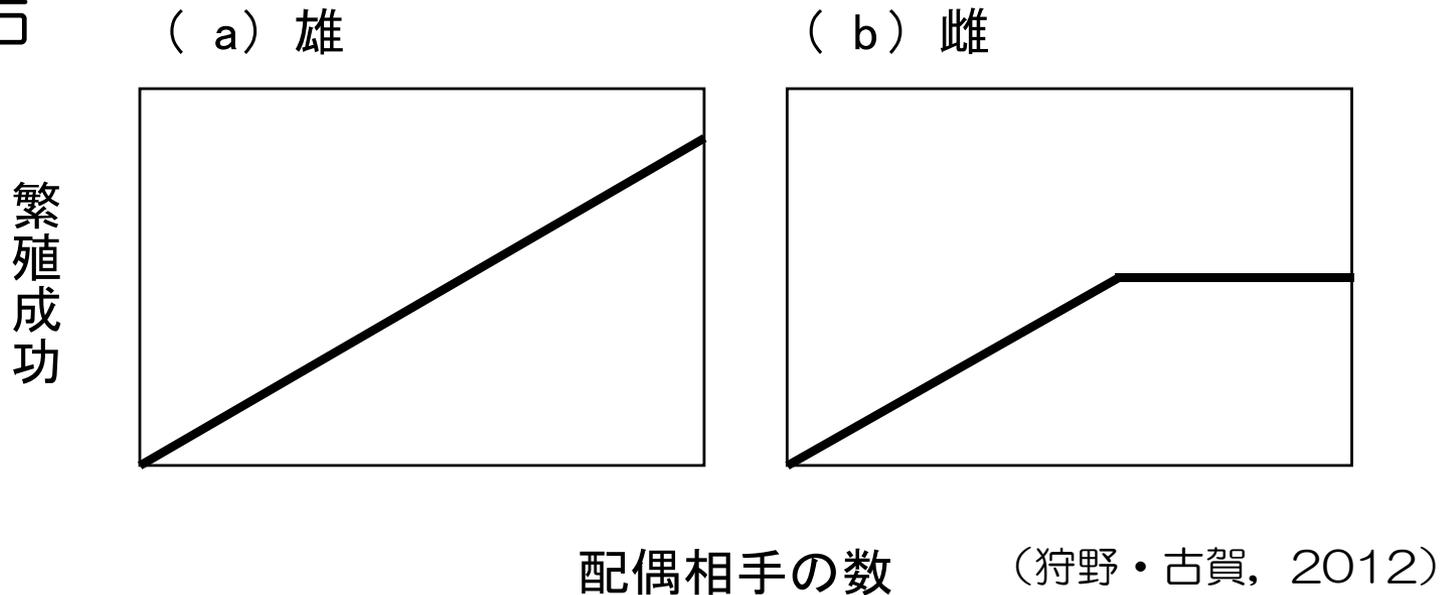
1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 2)

- 適応 (繁殖)
 - 子どもの数

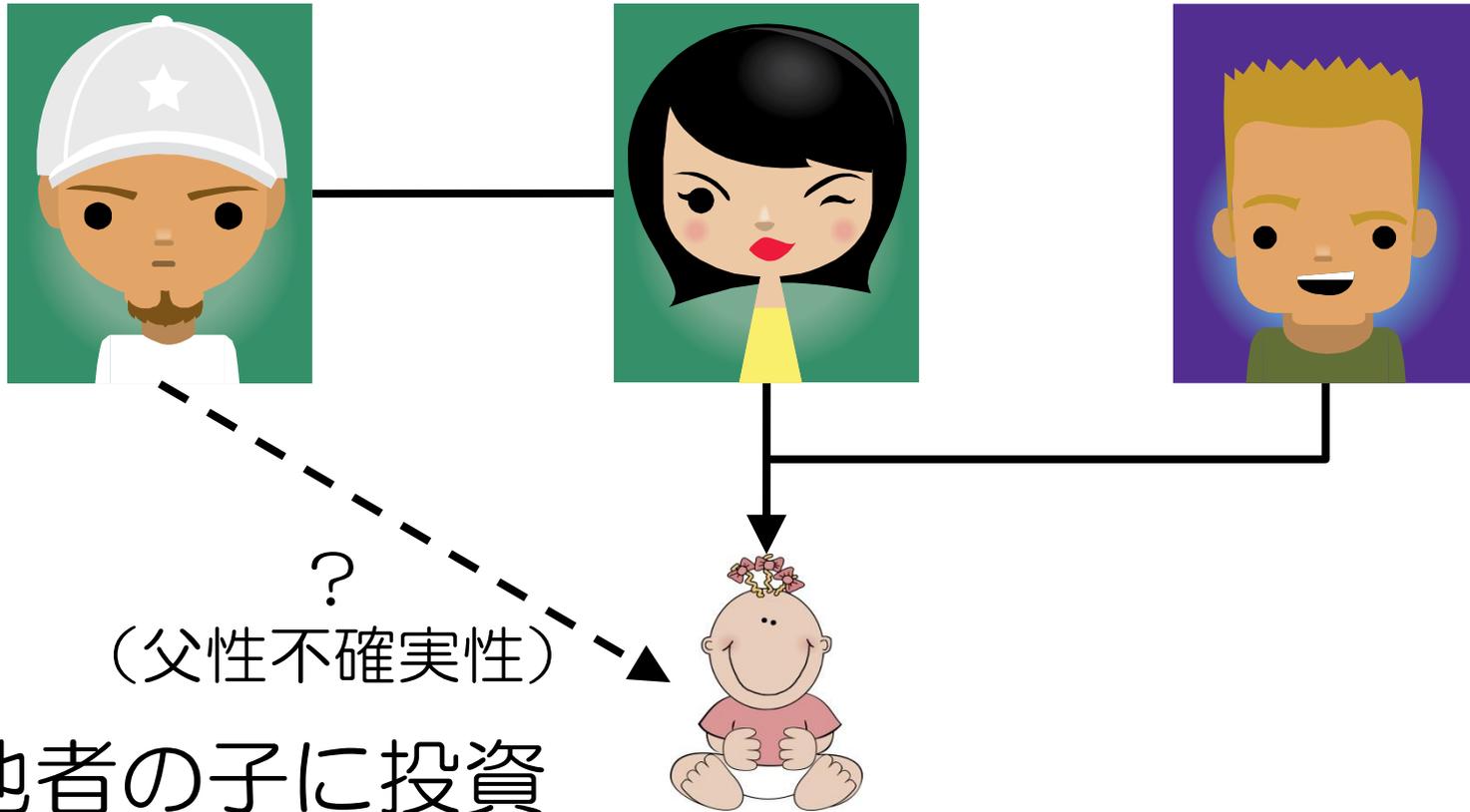
- 適応問題 (adaptive problem)
 - 適応を妨げる問題への直面
 - 性別による戦略の違いと性的葛藤

1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 2)

- 男性は性関係が繁殖成功（子どもの数）に直結



- 男性：より性関係を持ちたい
- 女性：むやみに性関係を持ちたくない

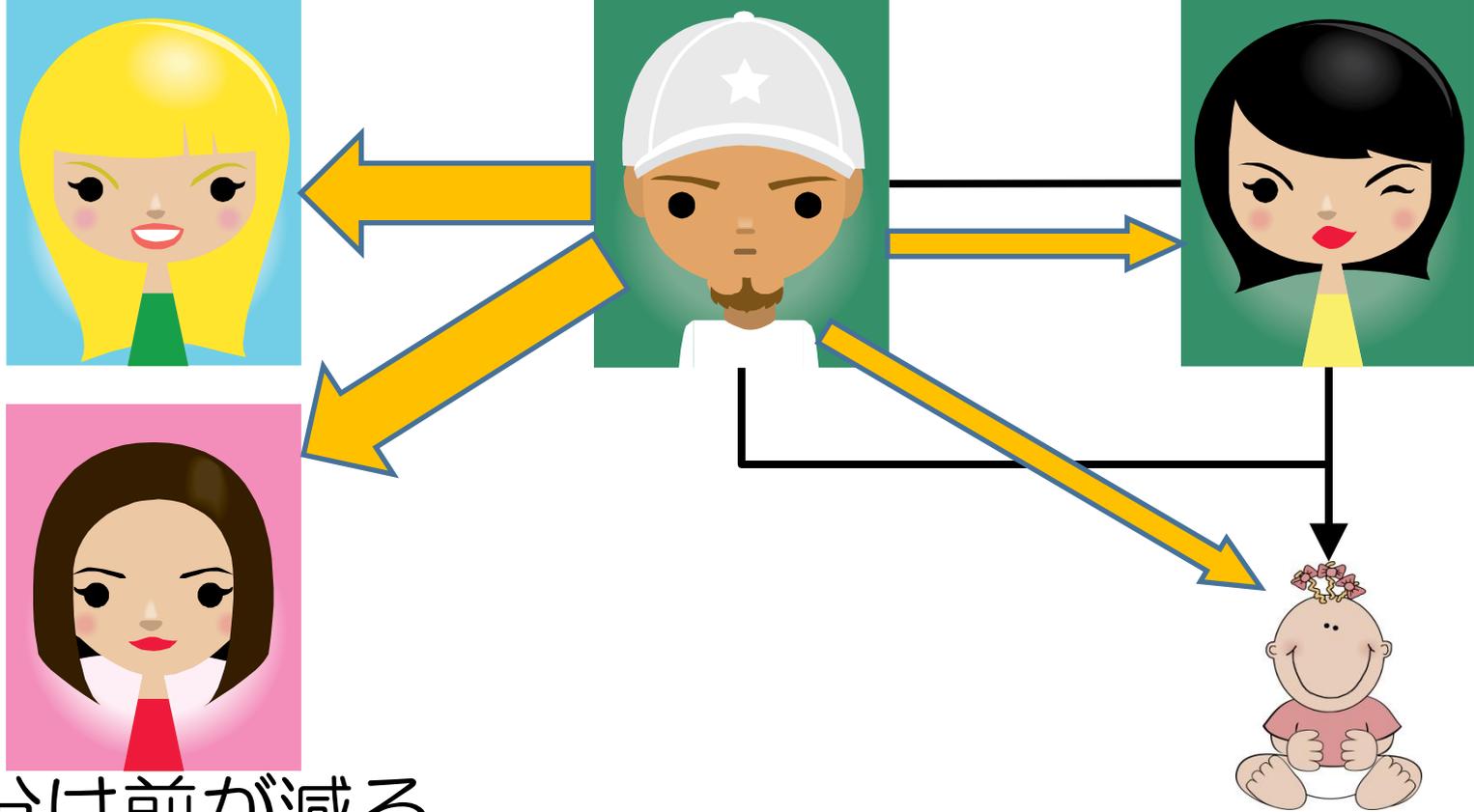


□ 他者の子に投資

- 自分の遺伝子は残らない。

□ 対処すべき適応問題

- → 性的な不倫 (sexual infidelity) をより警戒
(Buss et al., 1992)



□ 分け前が減る。

- もしかしたら子ども（遺伝子の乗り物）は生き残れないかも知れない。

□ 対処すべき適応問題

- → 情緒的な不倫（emotional infidelity）をより警戒（Buss et al., 1992）

1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 3)

- パートナー関係維持行動 (mate retention behavior)
 - 様々なやり方 (Buss & Shackelford, 1997; Buss et al., 2008)

ネガティブ ↔ ポジティブ

束縛
侮辱
暴力

プレゼント
コミットメント

- ❖ パートナーの監視
 - ❖ パートナーへの否定的関わり
 - ❖ ライバルへの否定的関わり
- e.g., 束縛, 脅迫, ライバルへの攻撃

- ❖ 公への所有のサイン
 - ❖ パートナーへの肯定的関わり
- e.g., プレゼント, コミットメント

1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 3)

- パートナー関係維持行動 (mate retention behavior)
 - 様々なやり方 (Buss & Shackelford, 1997; Buss et al., 2008)

ネガティブ ↔ ポジティブ

- IPVは最もネガティブなタイプの1つ
 - 選択は稀 (Buss & Duntley, 2011)
- Question: 選択に個人差が寄与?

女性

男性

長期配偶

- ・ 協力
- ・ リソース維持

- ・ 協力
- ・ 父性不確実性低減

長期的・協力的パートナー関係維持
→ ポジティブ

短期配偶

- ・ 良い遺伝子
- パートナー維持不要

- ・ ~~協力~~
 - ・ 父性不確実性低減
- 一時的に強力な支配 →
ネガティブ (IPV含む)

- ・ 査定のため
- 一時的ではだめ

- ・ リソースの引き出し
- 一時的に強力な支配が
意味を持つ

❖ ただし先行研究なし

❖ e.g., Buss & Duntley, 2011

❖ 早い生活史戦略 (r戦略)

生活史戦略 (K-factor)

❖ 遅い生活史戦略 (K戦略)

遺伝と幼少期の環境によって形成される行動パターンのセット

環境が不安定で将来の見通しが利かない

- 即時的利益 (今を生き抜く)
- 短期配偶戦略 (質より量; 悠長に育てられない)

環境が安定的で将来の見通しが利く

- 長期的利益 (将来的に最も高利益を)
- 長期配偶戦略 (量より質; 少数の子どもを確実に)

一時的に強力なパートナー維持 (IPV)

長期的で協力を促進するパートナー維持 (IPVではない)

Hypotheses

IPVのリスクファクター Vagi et al. (2013)

加害リスクファクターカテゴリ 例

メンタルヘルス	うつ, 不安
攻撃的思考/認知	交際関係での暴力受容
若い時の暴力	ケンカ, 全般的な反社会行動
薬物使用	アルコール, マリファナ
危険を伴う性行動	8年生で性経験あり, セックスパートナーが多い
恋愛/友人関係の質が悪い	敵意的なカップル関係, 反社会的友人との関与
家族の質が悪い	両親の対立, 子どもの頃の身体的虐待
個人の属性	子供の性別, 人種
暴力的なメディア	-

□ 早い生活史戦略はリスクファクターを包含?

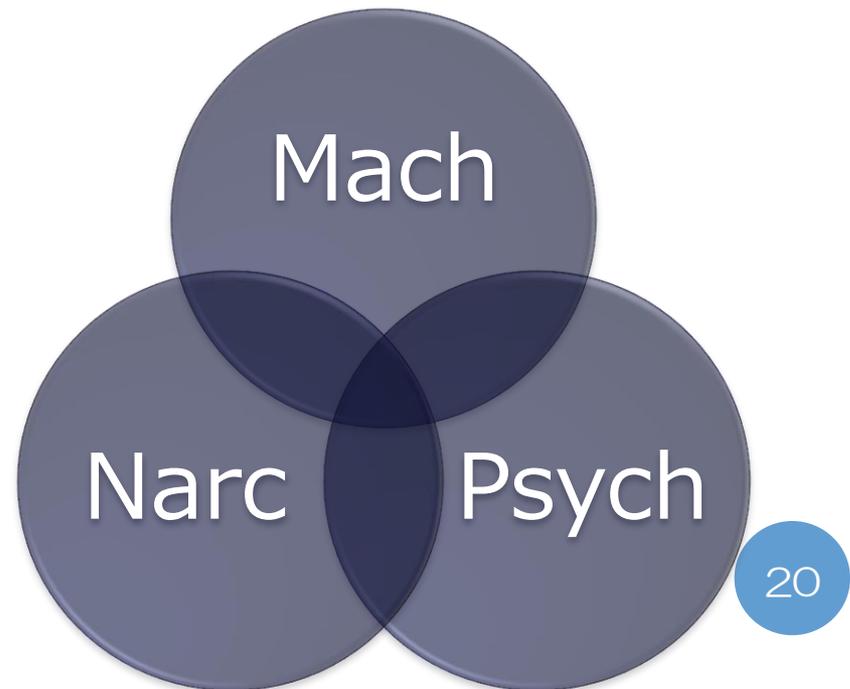
18

1.2. 生活史理論 (life history theory; p. 5)

- 生活史戦略による統合的理解
 - リスク → IPV
 - ◆ 明らかにされてきたリスクファクター達
 - ⇔ 重要なことは、生活史戦略→IPV?
- 究極要因を想定
 - パートナー関係維持行動
 - IPV選択の個人差として生活史戦略
 - ◆ 早い生活史戦略であるほどIPV
- 至近要因は？

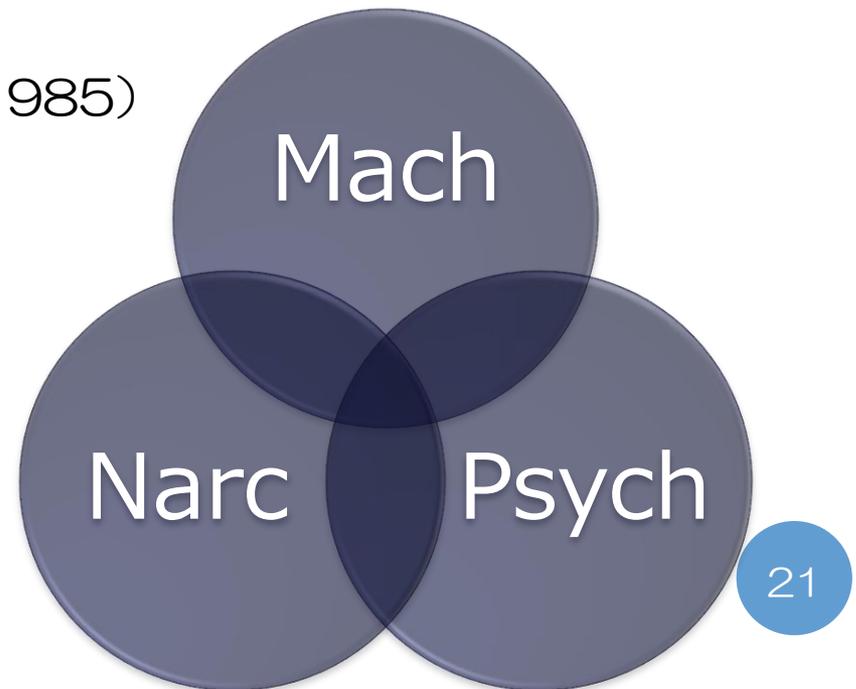
1.3. Dark Triad (p. 5)

- IPVリスクファクターを包括する至近要因は?
 - Dark Triadに着目
 - ◆ 5因子モデルとは異なる, ネガティブな側面を捉えるパーソナリティ群



1.3. Dark Triad (p. 5)

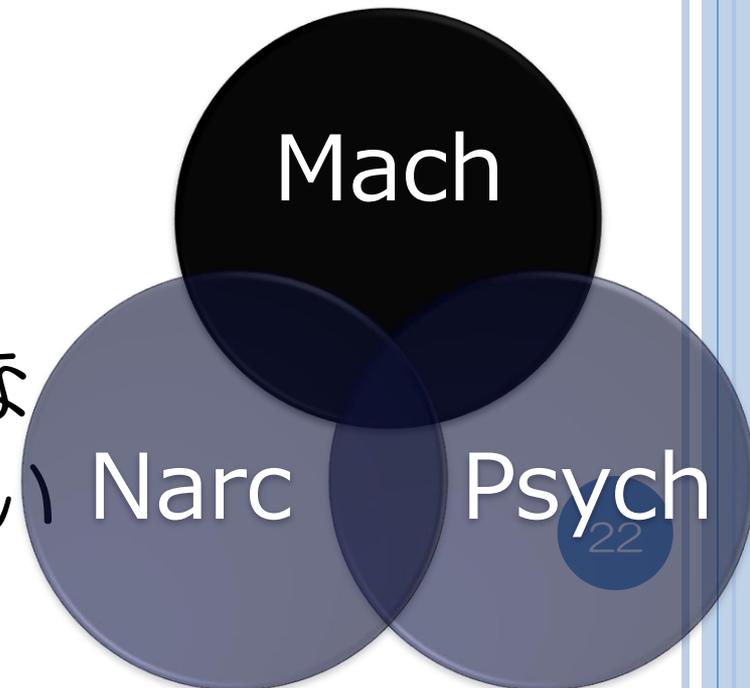
- 社会的に望ましくない3パーソナリティ
(Furnham et al., 2013; Paulhus & Williams, 2002)
 - マキャベリアニズム (Christie & Geis, 1970)
 - ナルシシズム (Raskin & Hall, 1979)
 - サイコパシー (Hare, 1985)
- それぞれ相関
 - 他者に対して冷淡
 - 他者操作的
 - 自己中心性



1.3. Dark Triad (p. 5)

- マキャベリアニズム (Christie & Geis, 1970)
 - シニカルな世界観 (cynical worldview)
 - 戦術的対人操作性 (tactic manipulation)
 - モラルの軽視

- 直感的には,
 - 合理的思考
 - そのために他者がどうなっても知ったこっちゃない



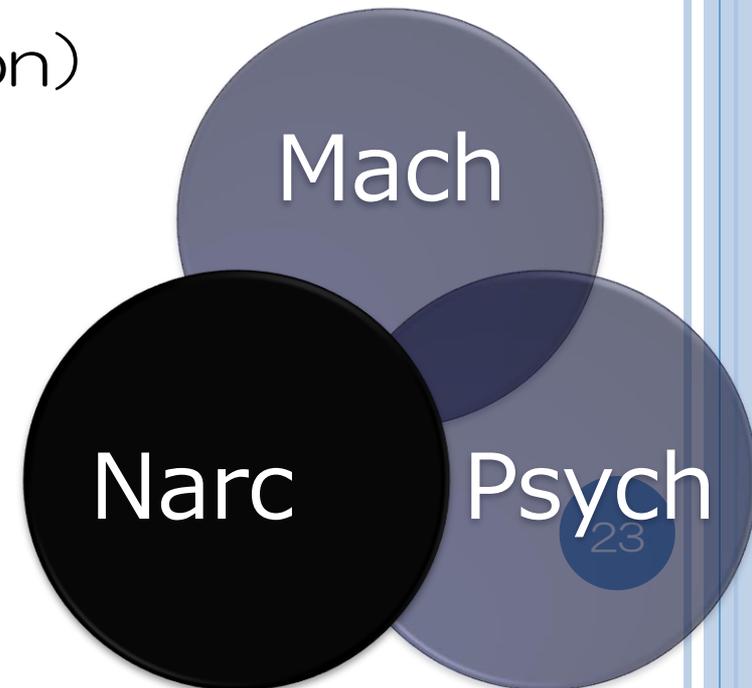
1.3. Dark Triad (p. 5)

□ ナルシシズム (Raskin & Hall, 1979)

- 尊大感 (grandiose)
- 特権意識 (entitlement)
- 優越性 (dominance)
- 自己顕示 (self-presentation)

□ 直感的には,

- 他者によく思われる
ために他者をダシにする



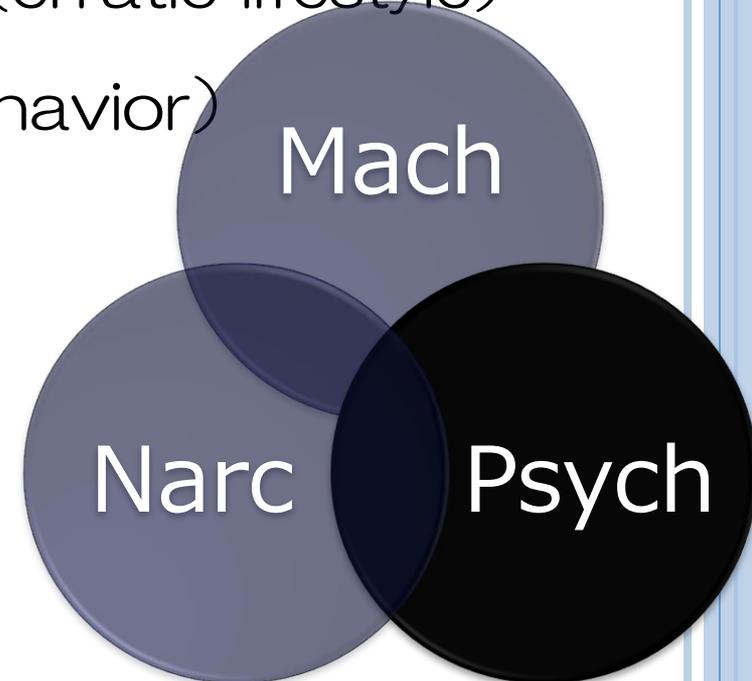
1.3. Dark Triad (p. 5)

□ サイコパシー

- 冷淡な感情 (callous affect)
- 対人操作 (interpersonal manipulation)
- 不安定ライフスタイル (erratic lifestyle)
- 反社会行動 (antisocial behavior)

□ 直感的には,

- えーい, やっちなえー



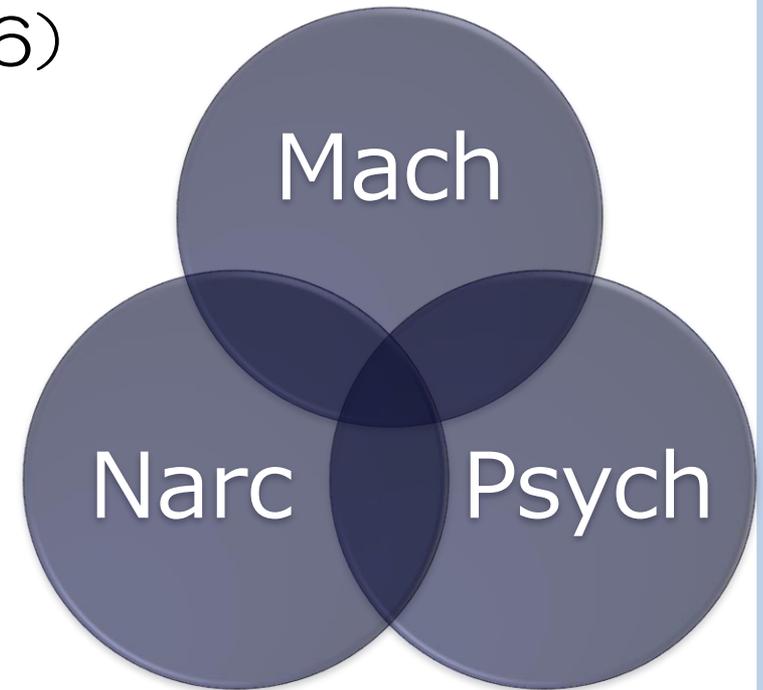
1.3. Dark Triad (p. 6)

□ 共通点

- 他者に対して冷淡
- 他者操作的
- 自己中心性

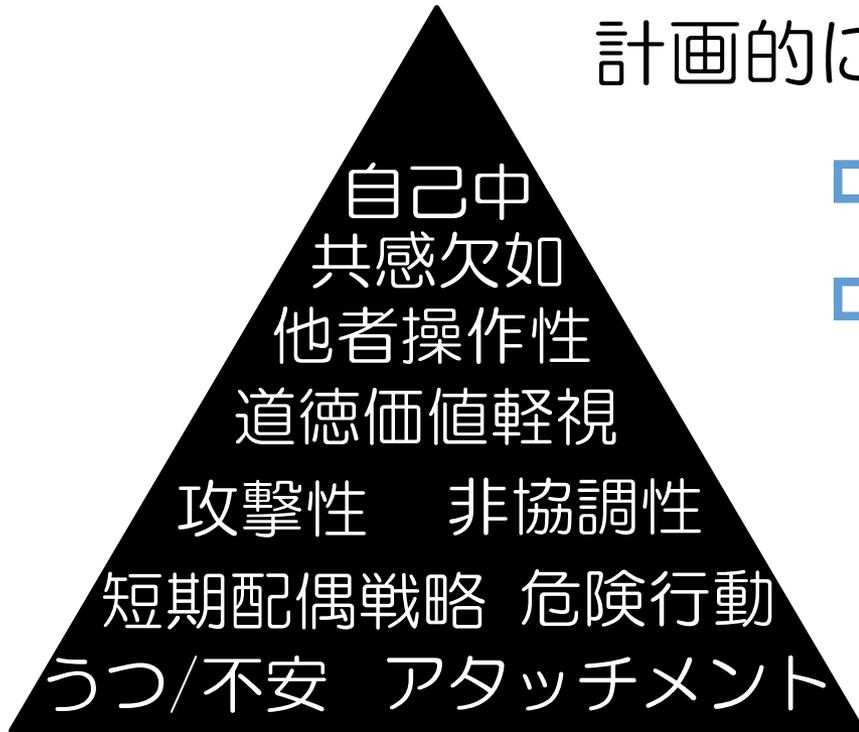
□ 相違点

- 計画性 (マキャベリアニズム)
- 対人関係重視 (ナルシシズム)
- 衝動性 (サイコパシー)



1.3. Dark Triad (p. 6)

❖ Mach
計画的に



- 共通するが，独自性も。
- 共通要素は早い生活史戦略の特徴 (Furnham et al., 2013; Jonason, Li, et al., 2013; Jonason, Webster, et al., 2012; McDonald, Donnellan, & Navarrete, 2012)

❖ Narc
自分を高めるために

❖ Psych
えーいやっちなまえ

IPVのリスクファクター Vagi et al. (2013)

加害リスクファクターカテゴリ 例

メンタルヘルス	うつ, 不安
攻撃的思考/認知	交際関係での暴力受容
若い時の暴力	ケンカ, 全般的な反社会行動
薬物使用	アルコール, マリファナ
危険を伴う性行動	8年生で性経験あり, セックスパートナーが多い
恋愛/友人関係の質が悪い	敵意的なカップル関係, 反社会的友人との関与
家族の質が悪い	両親の対立, 子どもの頃の身体的虐待
個人の属性	子供の性別, 人種
暴力的なメディア	-

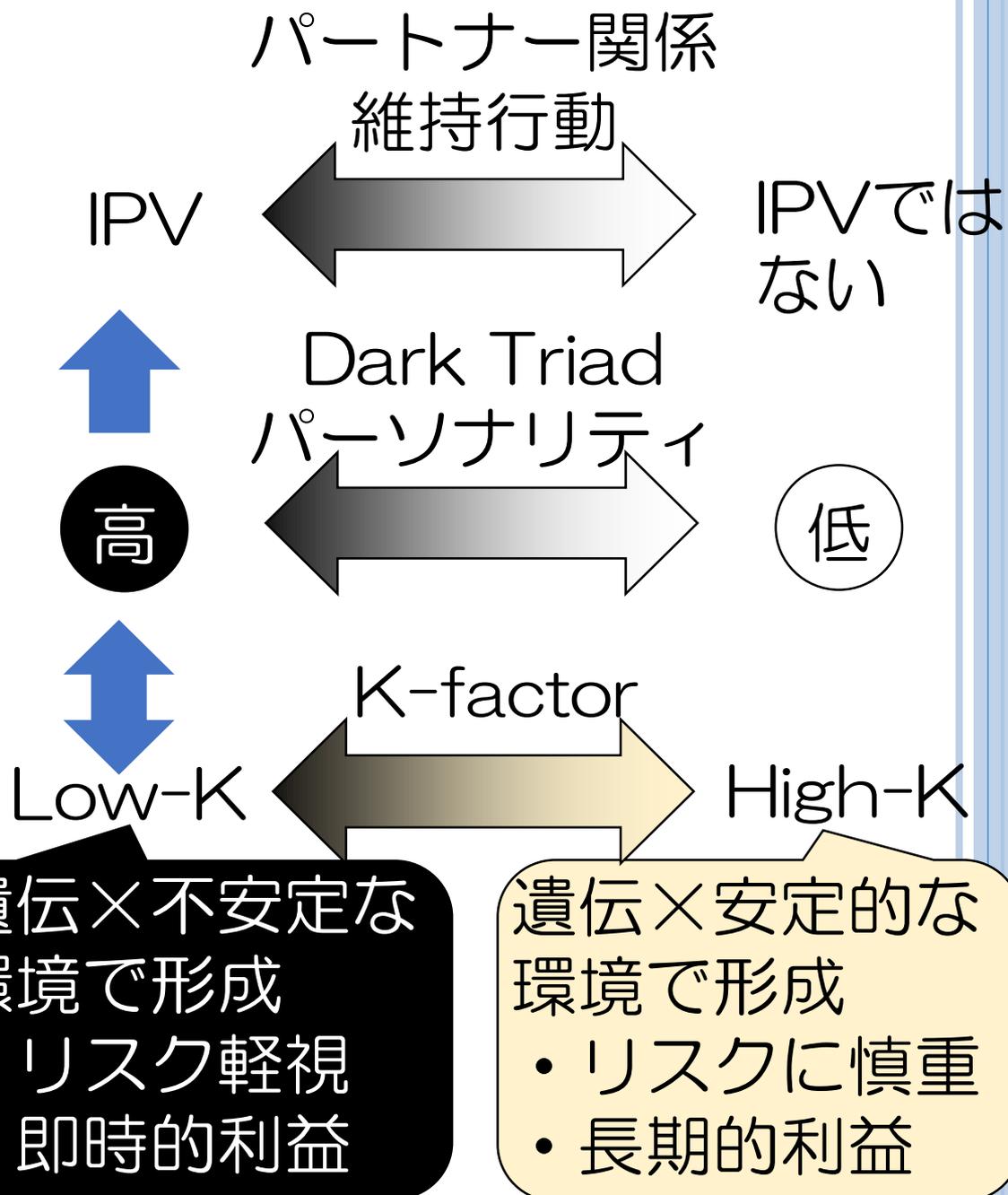
□ Dark Triadはリスクファクターを包含?

第1章のまとめ (p. 8)

- IPVの多くのリスクファクター
 - ⇔ 統合的な説明は？
- 究極要因として生活史戦略で統合可能？
- 至近要因としてDark Triadで統合可能？
 - 特にDark Triadの共通要素

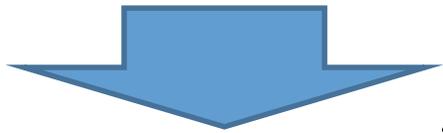
本研究の仮説

- IPVの発生メカニズムを明らかにする
- 至近要因
 - Dark Triad
- 究極要因
 - 生活史戦略 (K-factor)



2.1. IPVの測定尺度 (p. 9)

- ❖ ばらばらな尺度
- ❖ 妥当性未検証
- ❖ 多様な形態を測定できていない



3つの調査で尺度作成 & 妥当性検証

調査1 (一般人)	調査2 (大学生)	調査3 (大学生)
<ul style="list-style-type: none">◆ 尺度構成◆ 人口動態データ◆ 行動特徴<ul style="list-style-type: none">✓ 飲酒・喫煙	<ul style="list-style-type: none">◆ パーソナリティ<ul style="list-style-type: none">✓ 境界性✓ 反社会性	<ul style="list-style-type: none">◆ 進化的行動パターン<ul style="list-style-type: none">✓ パートナー関係維持

調査1 (一般人)

- 18-39歳の一般人
- $N_{\text{female}} = 300$
- $N_{\text{male}} = 298$
- 平均28.8歳, $SD = 5.79$

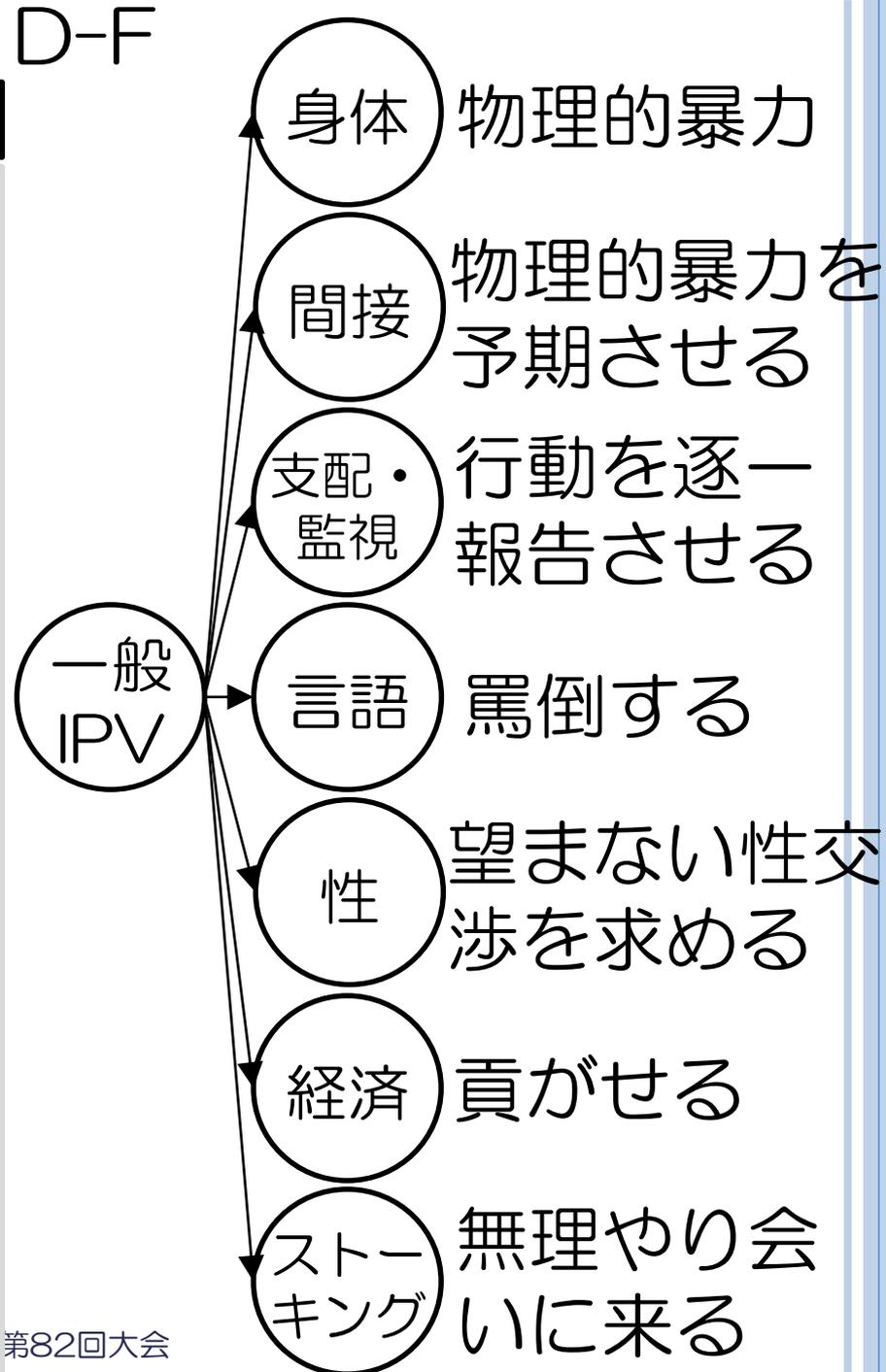
◆ 人口動態データ

- ✓ 性別 (n.s.) ⇔ 性が主
- ✓ 年齢 (n.s.) ⇔ n.s.
- ✓ 学歴 (-) ⇔ n.s.

◆ 行動特徴

- ✓ 喫煙 (+) ⇔ .10-.20
- ✓ 飲酒 (+) ⇔ .09-.13

❖ 概ね仮説を支持



調査2 (大学生; p. 10)

- 大学生344名
- $N_{\text{female}} = 182$
- $N_{\text{male}} = 162$
- 平均19.0歳,
- $SD = 1.25$

◆ パーソナリティ (App G)

- ✓ 境界性 (+)
⇔ .16-.27
- ✓ 反社会性 (+)
⇔ .19-.25

❖ 概ね仮説を支持

調査3 (大学生; p. 11)

- 大学生130名
- $N_{\text{female}} = 80$
- $N_{\text{male}} = 50$
- 平均19.7歳, $SD = 1.49$
- ◆ 進化的行動パターン (App H, I)

✓ パートナー関係維持行動 (+) ⇔ .18-.64

- パートナーの監視
- パートナーへの否定的関わり
- パートナーへの肯定的関わり
- 公への所有のサイン
- ライバルへの否定的関わり
- ✓ 5領域は相関

❖ 概ね仮説を支持

2.1. IPVの測定尺度 (p. 12)

- 多様なIPV形態を測定する尺度の作成
 - 7形態
- 妥当性が検証された。
 - ⇔ ただし、係数は低い
 - ◆ リスクファクターがIPVに直結するわけではない。
- 今後の研究が必要
 - ⇔ 概ね先行研究と整合 → モデル検証で使用する。

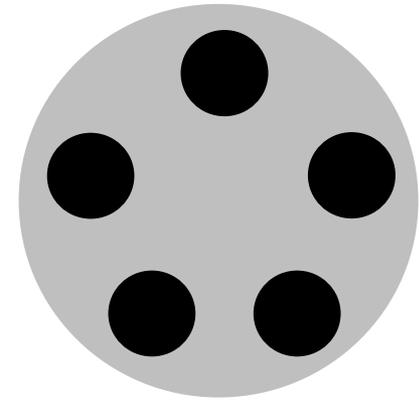
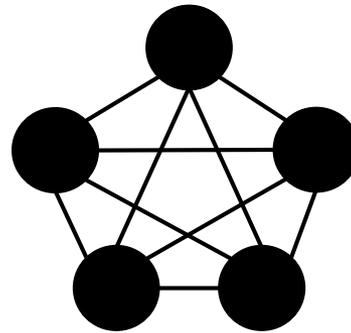
2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 13)

- 生活史戦略は様々な側面に反映される
 - 認知, 行動, 態度, 志向etc.
- Arizona Life History Battery (ALHB)
 - 本来の測定 (199項目のバッテリー)
 - 高いほど遅い生活史戦略
- ⇔ 長すぎる & その中の20項目 (Mini-K) である程度測定可能 (Figueredo et al., 2006)
 - → 多くの研究でMini-Kが使われる (Figueredo et al., 2014)

2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 13)

Mini-K

- ❖ 生活史戦略は1次元?
(Richardson et al., 2017)



Mini-K-J (Kawamoto, 2015)

- ❖ 一般成人 (30-50代)
- ❖ 遅い生活史戦略特徴
- ❖ 大学生にも応用可能?
- ❖ 早い生活史戦略特徴は?

2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 13)

検証課題1	検証課題2	検証課題3
◆ 1次元性 ✓ 単一の高次因子を仮定できるか	◆ 大学生への応用	◆ 早い生活史戦略特徴への応用 ✓ 特性 ✓ 行動特徴

□ 調査

- 大学生を対象
- 早い生活史戦略特徴を使用
- ※日本の大学生にそぐわない項目を除外
 - ◆ 宗教関係項目, 自分の子どもに関する項目

2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 13)

□ 参加者

- 大学生455名
 - ◆ $N_{female} = 247, N_{male} = 208$
- 平均19.0歳, $SD = 1.19$

□ 測定

- Mini-K-J (K-factorの測定; App J)
- SD3 (Dark Triadの測定; App L)
- PDQ-R (反社会性, 境界性パーソナリティの測定; App G)
- 喫煙・飲酒の程度 (行動特徴, 単一項目)

2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 14)

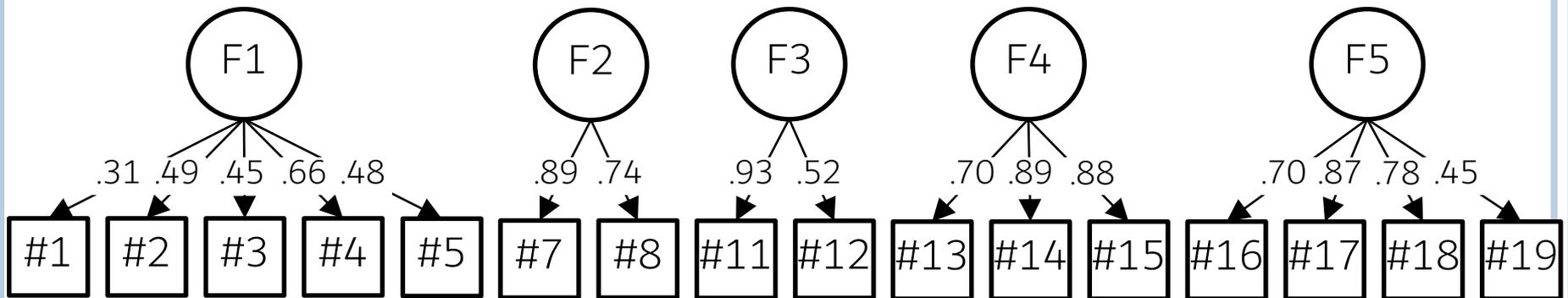
(Table R2, 2.5, Appendix K, M)

□ 5因子モデルで確証的因子分析

– 適合度, 負荷量とも基準を満たす

- ◆ $\chi^2(94) = 172.52***$
- ◆ CFI = .964
- ◆ TLI = .954
- ◆ RMSEA = .043
- ◆ SRMR = .042

	F1	F2	F3	F4
F1. 先読み・計画性・統制性				
F2. 両親との関係の質	.35			
F3. パートナー間の絆	.25	.28		
F4. 親族との関わり	.36	.37	.21	
F5. 友人との関わり	.50	.48	.33	.37



□ 相関のパスは省略

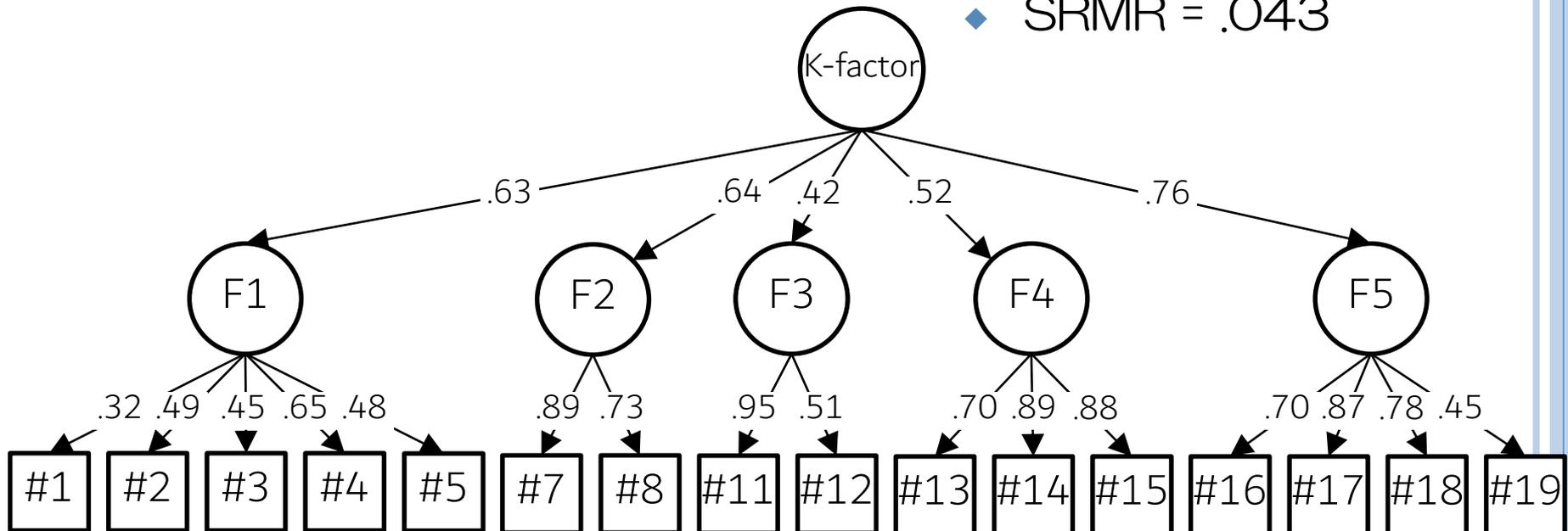
2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 14)

(Table R2, 2.5, Appendix K, M)

□ 高次因子として1因子を仮定できるか？

- 適合度も良好
- → 高次レベルで1次元性を仮定

- ◆ $\chi^2(99) = 176.24***$
- ◆ CFI = .965
- ◆ TLI = .957
- ◆ RMSEA = .041
- ◆ SRMR = .043



2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 14)

検証課題2, 3 (Table 2.9)

- ◆ 大学生への応用
- ◆ 早い生活史戦略特徴への応用
 - ✓ 性差 (女性>男性) ⇔ K-factorのみ女性 > 男性
 - ✓ マキャベリ (不明) ⇔ n.s.
 - ✓ ナルシ (不明) ⇔ 正の関連 (遅い生活史戦略)
 - ✓ サイコ (-) ⇔ 負の関連
 - ✓ 境界性 (-) ⇔ 負の関連
 - ✓ 反社会性 (-) ⇔ 負の関連
 - ✓ 喫煙 (-) ⇔ 負の関連
 - ✓ 飲酒 (-) ⇔ n.s.
 - ✓ 交際人数 (-) ⇔ n.s.
- ◆ パーソナリティは概ね仮説を支持
- ◆ 行動指標は喫煙のみ仮説支持

2.2. 生活史戦略の測定尺度 (p. 15)

- Mini-K-Jの1次元性 → 高次概念で仮定
- 特性（パーソナリティ）での妥当性OK
 - 年齢に制限されない変数 (McCrae et al., 2000)
- 行動特徴は妥当性不十分
 - 年齢に制限されるため?
 - → 行動指標とK-factorの関連で用いる場合, 注意を要する

第2章のまとめ

□ IPV尺度を確立

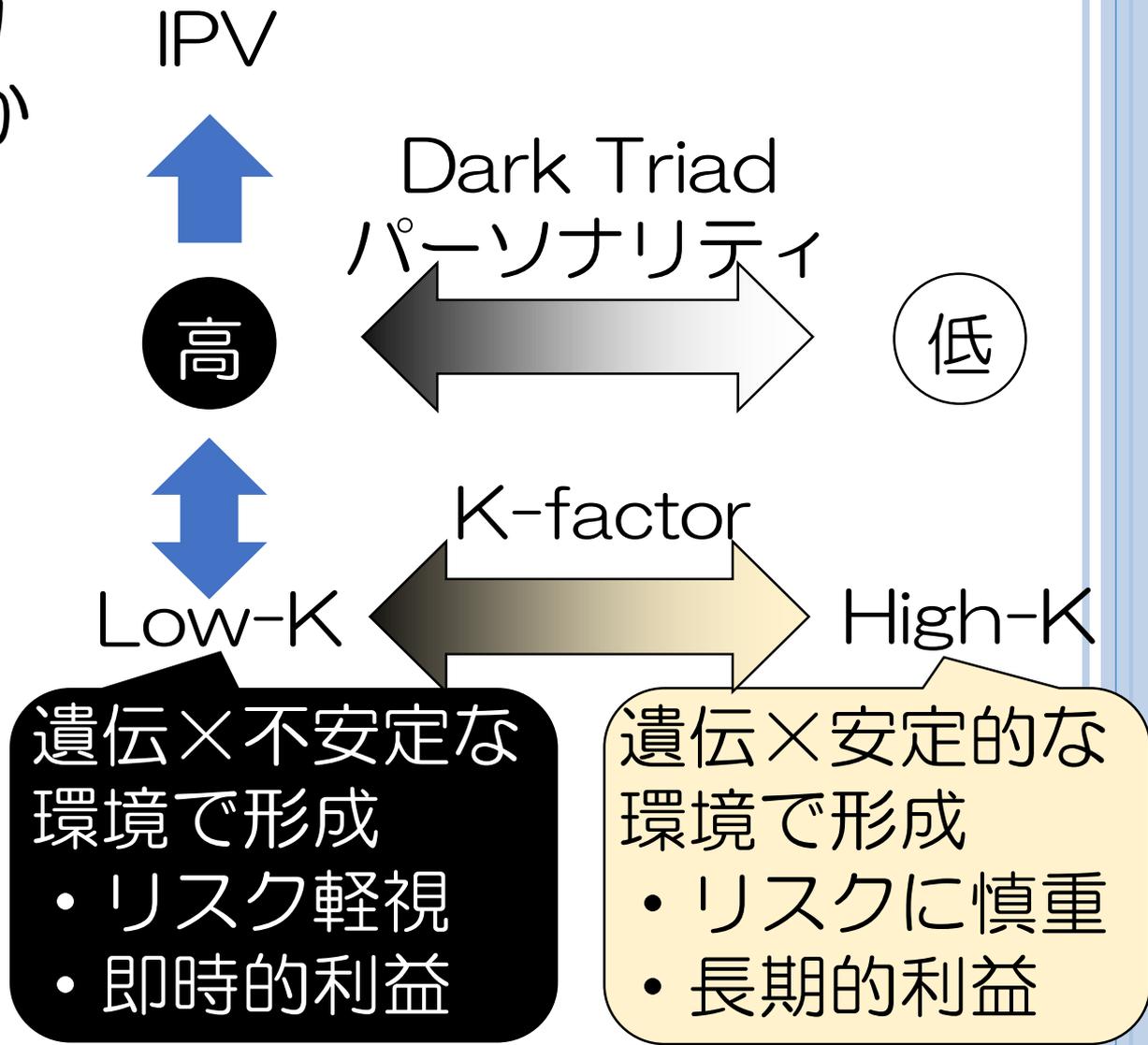
- 多様なIPV形態を測定
- 妥当性を検証
 - ◆ ⇔ 係数が低いため、今後の検討の余地あり

□ Mini-K-J

- 高次レベルでの1次元性
- 大学生への応用可能性
 - ◆ ⇔ 行動指標との関連では注意を要する。
 - ◆ IPVは行動だが、低年齢でも発生 → Mini-K-Jで捉えられるだろう。

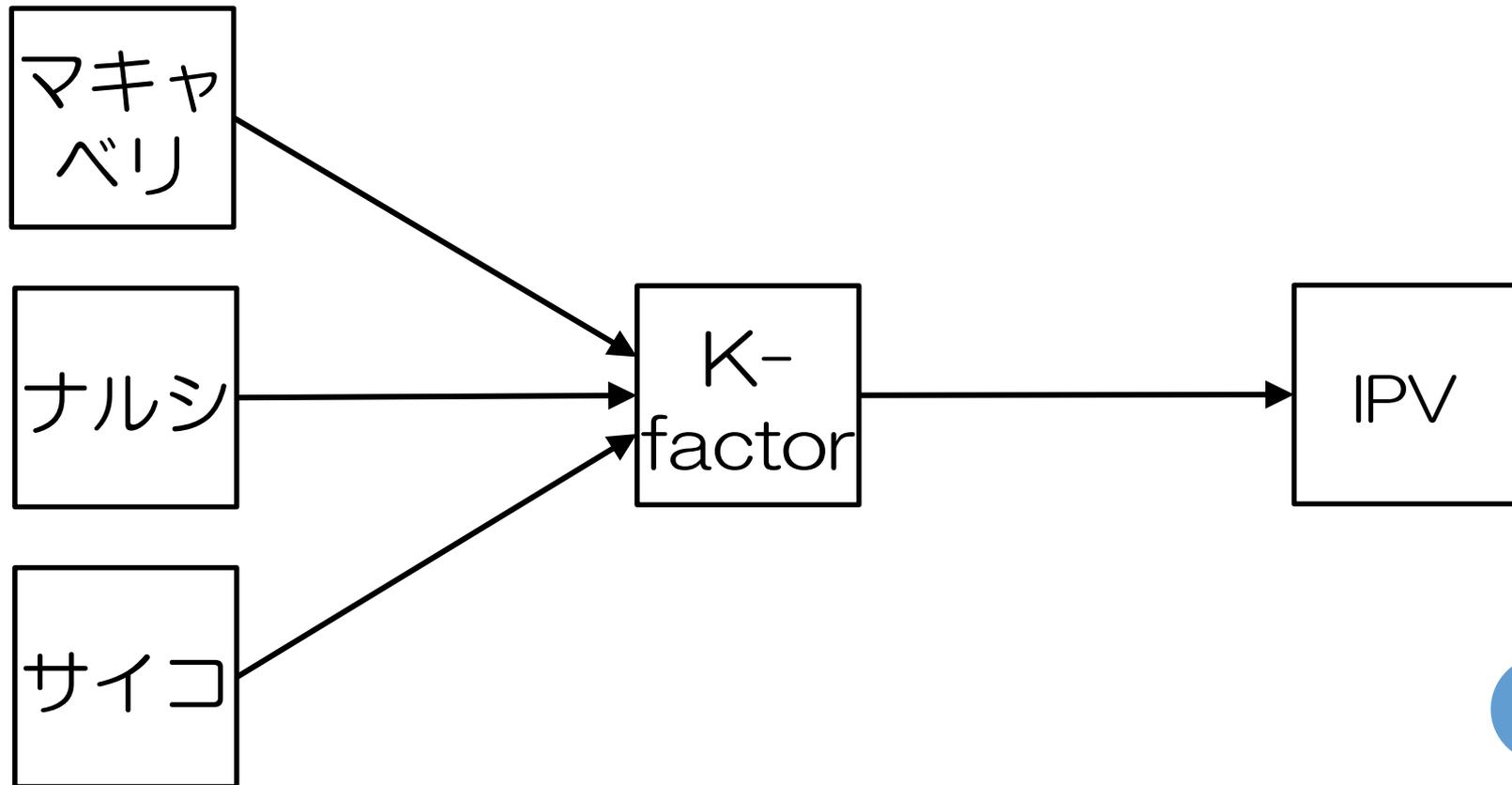
第3章 モデル検証 (p. 15)

- IPVの発生メカニズムを明らかにする
- 至近要因
 - Dark Triad
- 究極要因
 - 生活史戦略 (K-factor)



3.1. モデル検証1 (p. 15)

- 仮説: 至近要因 → IPVの効果は, 究極要因の効果に規定される



3.1. モデル検証1 (p. 15, 16; Table 3.1, 3.2)

□ 参加者

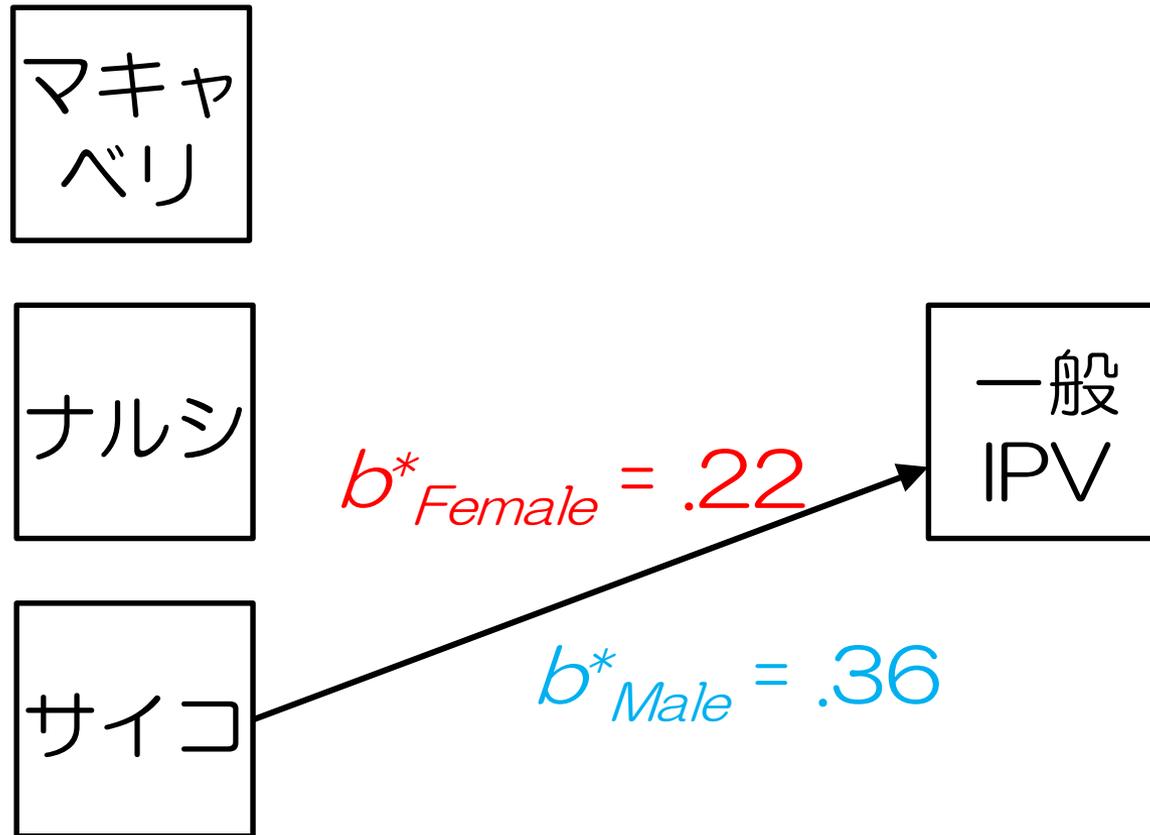
- 大学生344名
 - ◆ $N_{female} = 182, N_{male} = 162$
- 平均19.0歳, $SD = 1.25$

□ 測定

- IPV尺度 (App D)
- Mini-K-J (K-factorの測定; App J)
- SD3-J (Dark Triadの測定; App L)

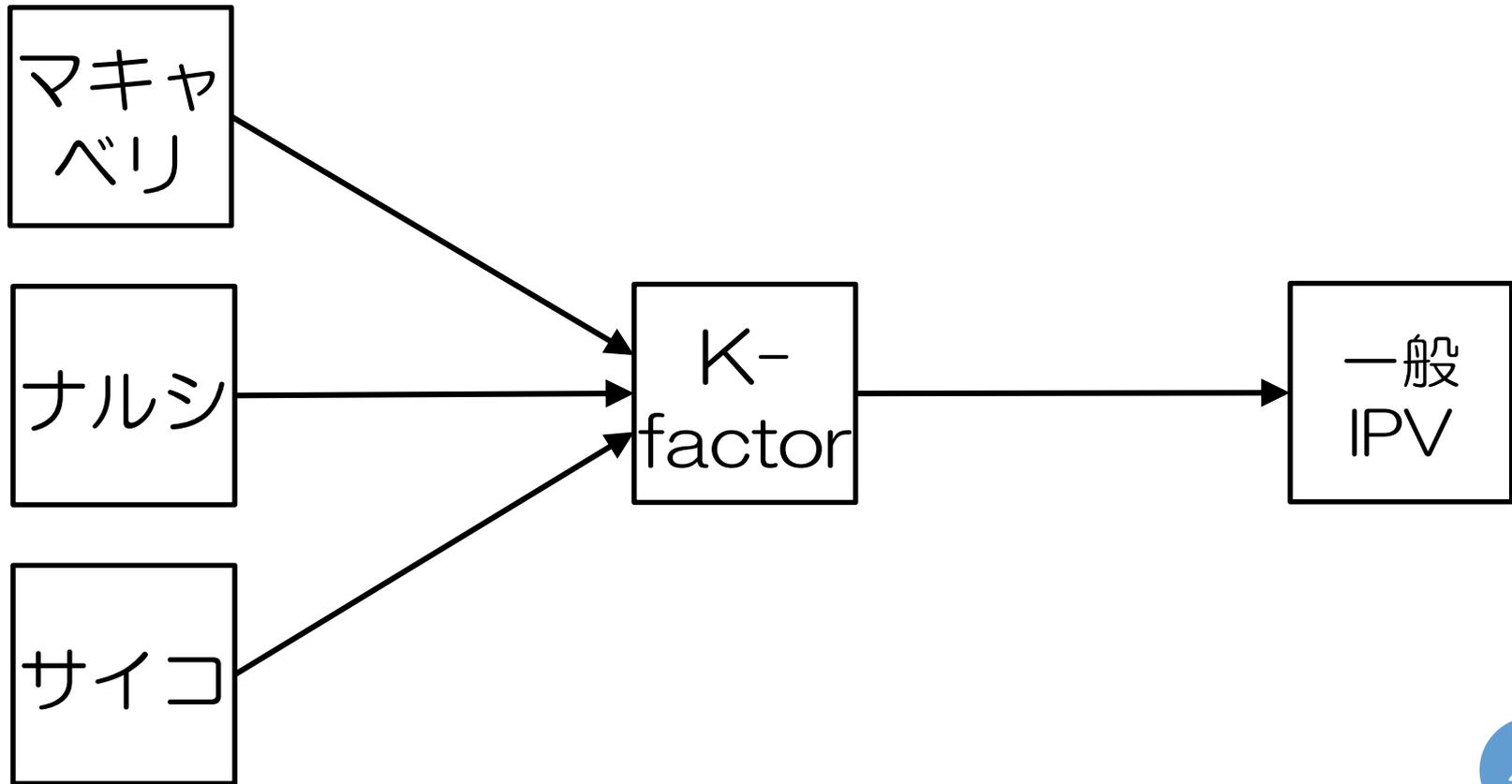
3.1. モデル検証1 (p. 16; Table 3.3)

□ 重回帰分析 (男女別; 年齢統制)



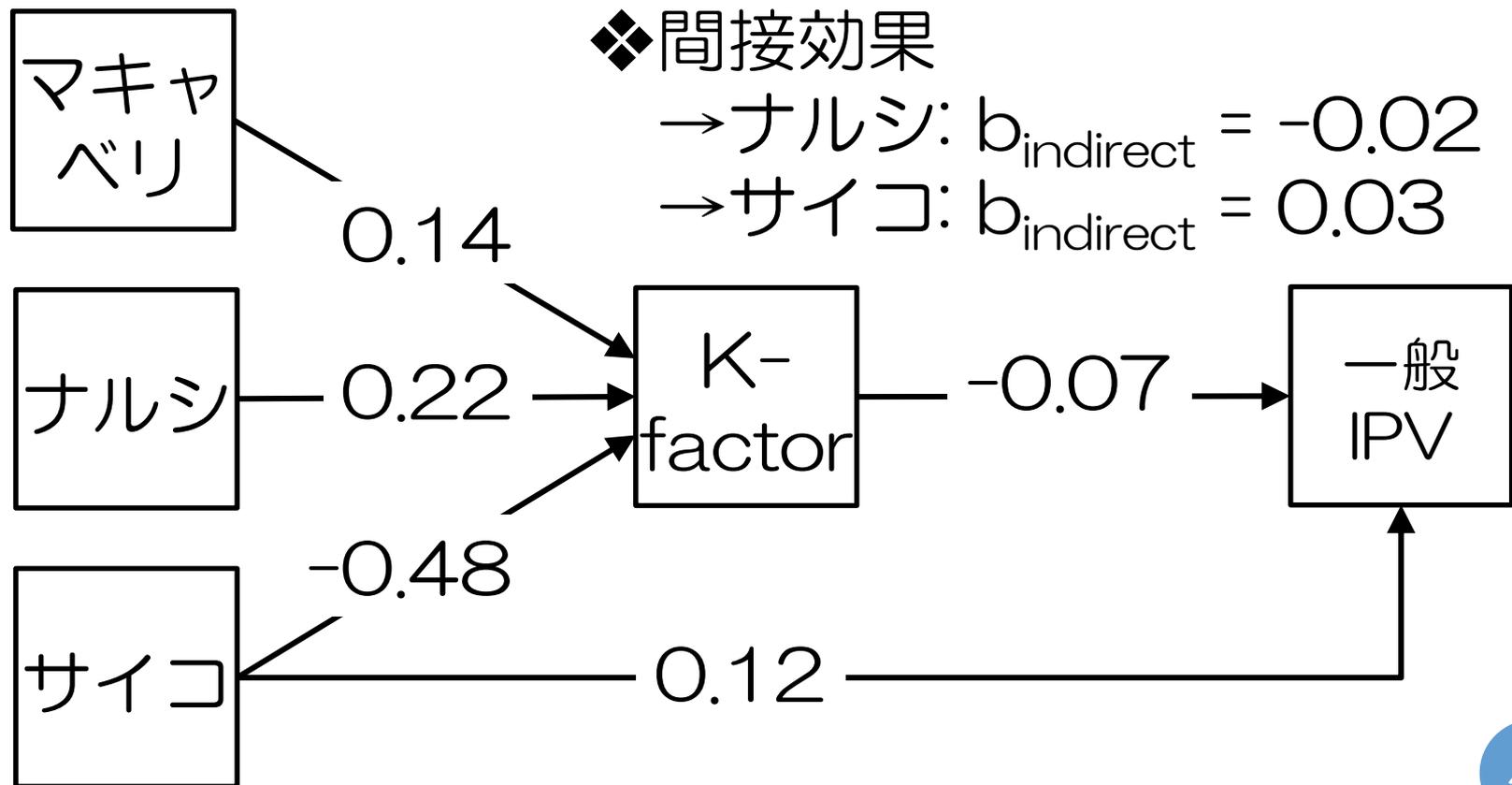
3.1. モデル検証1 (p. 17)

□ 媒介分析: 仮説



3.1. モデル検証1 (p. 17, Table 3.4, Figure 3.1)

■ 媒介分析: 性別をプール (年齢統制)



3.1. モデル検証1 (p. 17)

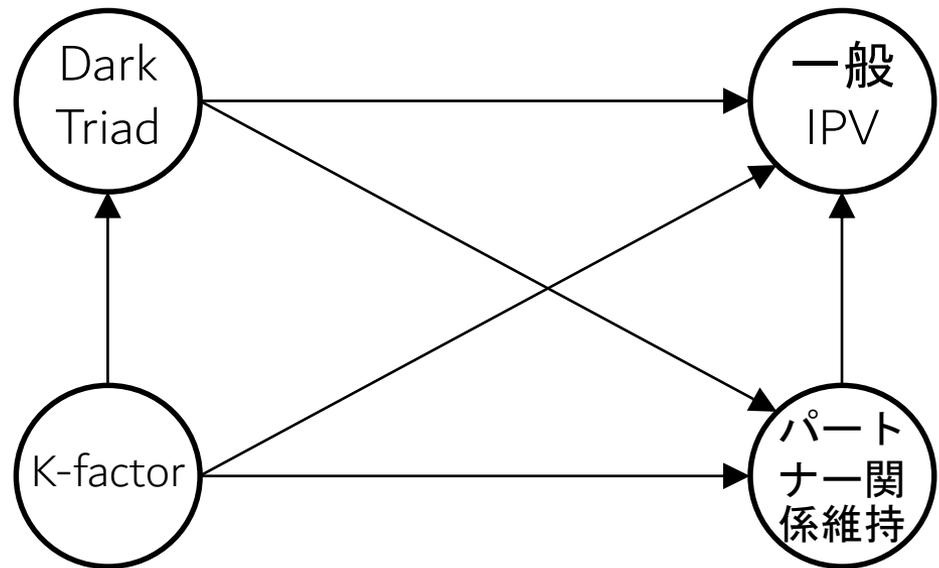
- わかったこと
 - Dark Triad（特にサイコパシー）とIPVとの関連を，早い生活史戦略が規定した。
- ただし，モデル検証1にはいくつかの問題

3.2. モデル検証2 (p. 18)

- モデル検証1の理論的問題点
 - IPVはパートナー関係維持行動?
 - ◆ パートナー関係維持行動がIPVに先行することを示すべき
 - K-factorは最も根底の変数では?
 - ◆ K-factorがDark Triadを説明するモデルが自然
 - 生活史理論は高次の理論
 - ◆ より高次概念同士の関連を検証するべき

3.2. モデル検証2 (p. 18)

- パートナー関係維持行動 → IPV を仮定
- K-factor → Dark Triad を仮定
- 下位因子を観測変数，上位因子を潜在変数として抽出



3.2. モデル検証2 (p. 18; Appendix N-Q)

□ 参加者

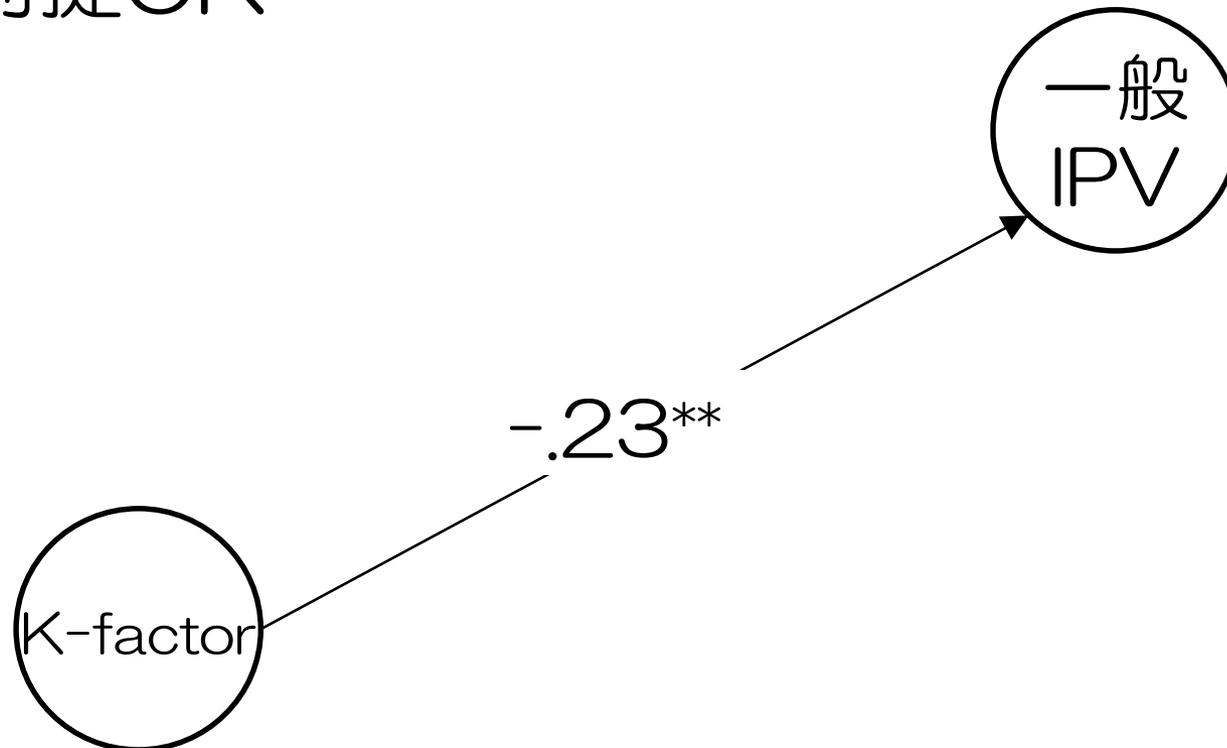
- 大学生380名
 - ◆ $N_{female} = 212, N_{male} = 168$
- 平均18.9歳, $SD = 1.20$

□ 測定

- IPV尺度 (App D)
- Mini-K-J (K-factorの測定; App J)
- SD3-J (Dark Triadの測定; App L)
- パートナー関係維持方略尺度 (App H, I)

3.2. モデル検証2 (p. 19; Table 3.9)

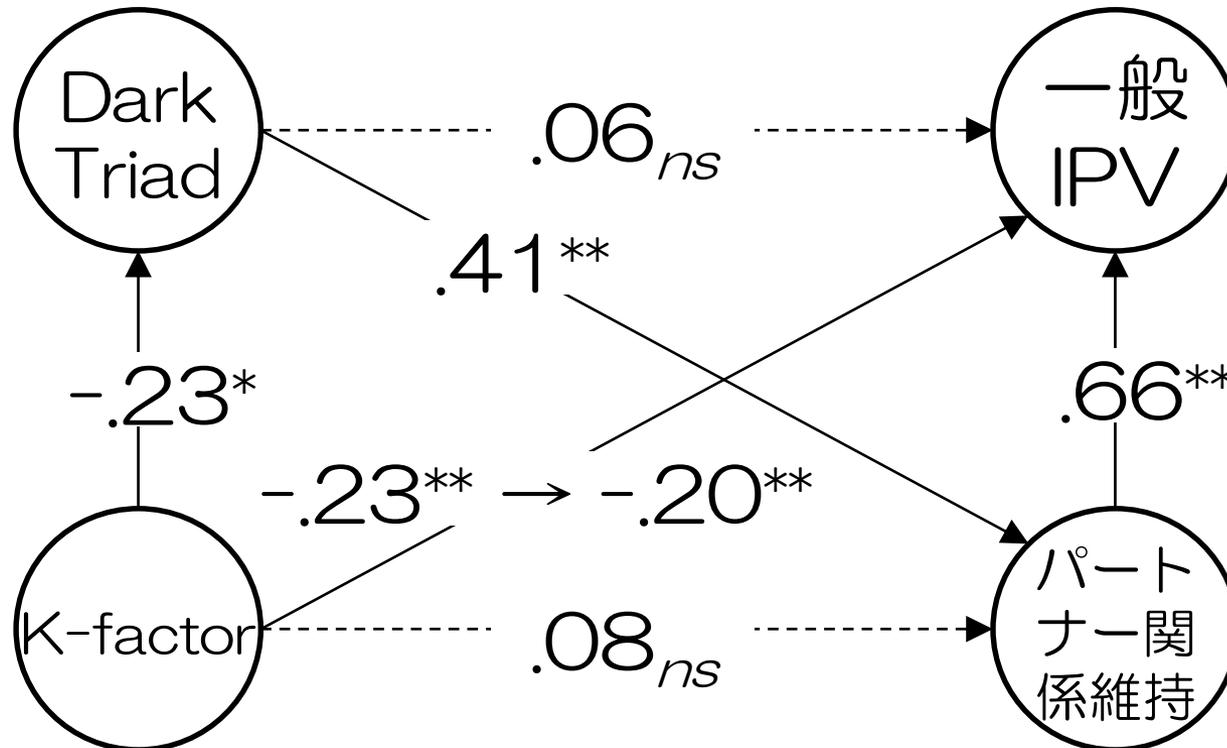
- まずは回帰分析（年齢，性別統制）
 - K-factor → 一般IPV
 - 前提OK



3.2. モデル検証2 (p. 19; Table 3.9)

□ 媒介分析 (年齢, 性別統制)

- K-factor → Dark Triad → パートナー関係維持 → 一般IPV: 仮説支持



$$b_{indirect} = -0.08, 95\%CI = [-0.25, -0.02]$$

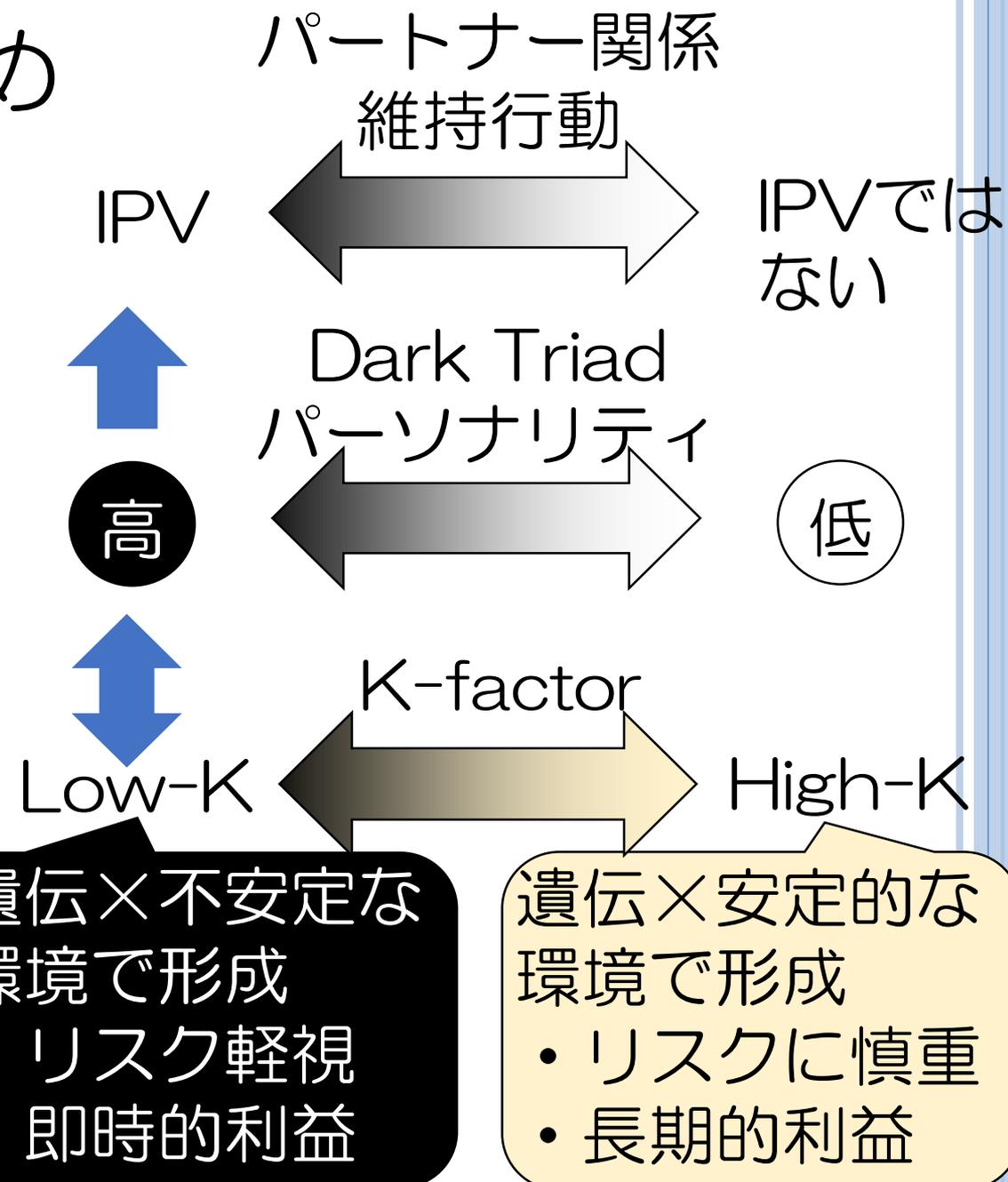
3.2. モデル検証2 (p. 19)

□ わかったこと

- 究極要因である早い生活史戦略はIPVを促進する。
- 究極要因である早い生活史戦略は、至近要因であるDark Triadを説明する。
- パートナー関係維持はIPVを説明する。
- 早い生活史戦略は、Dark Triad, パートナー関係維持行動を媒介してIPVを促進する。

第3章のまとめ

- 仮説支持。
- IPVはパートナー関係の1つ
- 選択の個人差
 - Dark Triad
 - ◆ 至近要因
 - 早い生活史戦略
 - ◆ 究極要因
- という可能性



第3章のまとめ

- ただし、Dark Triadの下位概念は必ずしも早い生活史戦略ではない。
 - サイコパシーが主に寄与
 - ⇔ ナルシは遅い，マキャベリは不明
 - ◆ ⇔ 短期的配偶志向はいずれも持っている
- IPVの各形態で生活史戦略と異なる関連
 - 支配・監視とK-factorはns

4.2. 限界点と今後の展望 (p. 19)

- 大きく8つ
- 1. 女性のIPVの進化的基盤は?
 - 「一時的」でも「強力な支配」
 - ◆ 男性: 性関係が持てればいい→説明可
 - ◆ 女性: 解釈が難しい
 - 良い遺伝子 (強力な支配不要)
 - 長期配偶のための短期的配偶 (一時的ではだめ)
 - → いずれも, 両特徴を満たさない。
 - リソース仮説が説明する?

4.2. 限界点と今後の展望 (p. 19)

- リソース仮説
 - ◆ 男性からリソースを引き出すための短期配偶
 - ◆ 男性による初期投資が大きいなら、
 - ◆ それを占有するために「一時的」で「強力な支配」を行ない、
 - ◆ すぐ破局し、
 - ◆ 次の男性に対して... (以下ループ)
- ただし、今回は検証できない。

4.2. 限界点と今後の展望 (p. 20)

□ 2. 個人特性のみ

– 日常的に変動する感情状態は？

- ◆ ネガティブ感情はIPVのトリガー (Birkley & Eckhardt, 2015; Buss & Duntley, 2011; Walker, 1979 齋藤訳 1997)

– パートナーとの相互作用は？

- ◆ パートナー関係がIPVを促進 (Giordano et al., 2010; Straus, 2008)

□ 3. 横断研究による1時点データ

– 生涯発達過程での個人差の変化は？ (Ellis, 2011; 遠藤, 2005; Kawamoto & Endo, 2015)

– 遺伝×環境相互作用は？ (安藤, 2014; Barnes et al., 2013; 遠藤, 2005; Figueredo et al., 2006; Vernon et al., 2008)

4.2. 限界点と今後の展望 (p. 20)

- 4. 実務応用は？
 - 臨床群に一般化できる？
 - メカニズムを踏まえた介入は？

- 5. IPVリスクファクターはDark Triadと生活史戦略に収束するか？
 - 理論的にはするはず (レビューより)
 - ⇔ 本研究では実際の変数として扱っていない

4.2. 限界点と今後の展望 (p. 20)

□ 6. 構成概念に関する問題

- 本研究では主に高次概念同士の関連
 - ◆ かつ、大きな効果は示されていない
- 下位次元では?
 - ◆ 高次概念と異なる関連を示すものもある

□ 7. サンプルの一般性

- 単一の大学を対象
- 平均年齢は20歳未満

4.2. 限界点と今後の展望 (p. 20)

- 8. 自己報告によるデータ収集
 - 認知能力などのバイアス?
 - 客観指標を測定する必要がある
 - ◆ 実験など

- 今後は、これらに対処する必要がある

4.3. ヒトの本質的理解へ向けて (p. 20)

- 進化心理学的アプローチ
 - 現象の根底に迫るアプローチの1つ
 - 至近要因と対立構造ではなく，相補的
- かつ，個人差への進化心理学的アプローチ
 - これまでは，ヒトにジェネラルな面
 - ⇔ 個人差も，同様に目を向ける必要
- 至近・究極両面から，ヒトの本質的理解に迫りましょう！

まとめ

- 研究の立ち位置:
 - IPVのメカニズムを明らかにする基礎的研究
- 目的:
 - IPVのメカニズムを至近・究極要因から明らかにする
- 結果:
 - 至近要因としてDark Triad, 究極要因として, 生活史戦略およびパートナー関係維持行動がIPVを促進する可能性
- ご意見ございましたら, 喜入 (s.kiire0518@gmail.com) までお願いいたします。